

平成29年9月

佐藤研吾 学位論文審査要旨

主 査 藤 原 義 之
副主査 磯 本 一
同 廣 岡 保 明

主論文

Transabdominal ultrasonography for assessing the depth of tumor invasion in gastric cancer

(経腹部超音波検査による胃癌の壁深達度評価)

(著者：佐藤研吾、齊藤博昭、八島一夫、磯本一、廣岡保明)

平成29年 Yonago Acta Medica 60巻 154頁～161頁

参考論文

1. Correlation between ultrasound findings of tumor margin and clinicopathological findings in patients with invasive ductal carcinoma of the breast

(浸潤性乳管癌患者における腫瘍辺縁の超音波所見と臨床病理学的所見との関連)

(著者：三宮直子、服部結子、上田直幸、紙田晃、小柳由貴、柳樂治希、生西朗子、
島林健太、橋本裕希、村田あや、佐藤研吾、廣岡由美、細谷恵子、石黒清介、
村田陽子、廣岡保明)

平成28年 Yonago Acta medica 59巻 163頁～168頁

審 査 結 果 の 要 旨

本研究は経腹部超音波検査（TUS）を用いて、胃癌の壁深達度診断に関する詳細な診断基準の設定を行い、従来の画像検査（内視鏡検査、超音波内視鏡検査、胃X線造影検査、CT、MRI）による壁深達度診断とTUSによる壁深達度診断を病理学的結果より比較検討したものである。その結果、TUSによる壁深達度診断は、全深達度において従来の画像検査による壁深達度診断と同程度の正診率を示した。さらに、TUSによる第3層（粘膜下層）の断裂様式に着目したところ、断端が内側（粘膜側）に向かってみられる症例はMP症例であることが多く、早期胃癌と進行胃癌の鑑別に寄与できる可能性があると考えられた。本論文の内容は、非侵襲的な検査であるTUSが、従来の画像検査と同程度の診断能を有するとともに、第3層断裂様式に着目することで、早期胃癌と進行胃癌の鑑別に有用であることを示唆するものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。